

## 7. 第50回日本ウイルス学会学術集会・総会開催記

喜田 宏

日本ウイルス学会をはじめ、企業と団体の暖かいご支援のお陰をもちまして、第50回日本ウイルス学会学術集会・総会を滞りなく、好評のうちに終了することができました。ここに深い感謝の念を込めて、ご報告申し上げます。

第50回日本ウイルス学会学術集会は、平成10月16日から18日の3日間、札幌メディアパーク・スピカ、STV ホールおよびかでる2・7を会場に、1,100名の参加の下で、盛大に開催されました。

日本ウイルス学会は、創立以来50年、人、動物と植物のウイルス病の予防、診断と治療あるいは根絶に寄与するとともに、生命科学の進展に大きく貢献してきました。しかし今もなお、ニパウイルス、新型インフルエンザウイルス、エボラウイルス、ニパウイルスやウエストナイルウイルスの出現、BSE（牛海綿状脳症）や口蹄疫などの発生と侵入、あるいはバイオテロリズムが人類を脅かしています。したがって、ウイルスのエコロジーの解明ならびに抗ウイルス薬や有効で安全なワクチンの開発等が一層望まれています。このような背景の下で、第50回という節目の本集會に医学、獣医学の臨床、微生物学、病理学、免疫学、農学および動・植物ウイルスの研究・教育者が全国から参集し、学術講演、シンポジウムおよびワークショップ等で研究成果の発表と討論を交しました。また、過去50年のウイルス学会の活動を振り返り、その現状と将来について、特にウイルス学が今後どのように社会に貢献すべきか、その役割について議論しました。学術集会および総会における会員相互の交流を通じて、公衆衛生、医・獣医療、動・植物防

疫ならびに生命科学の発展に寄与することを目的とする本集會の趣旨は十分に活かされたものと存じます。

10月15日（火）には、17時から19時までスピカにおいて、市民公開講座「市民のためのウイルス学入門」を開催しました。講師と演題は次の通りです。

1. 喜田 宏（北海道大学教授）：ウイルスとは？
2. 富樫武弘（市立札幌病院副院長）：北海道「はしか」ゼロ作戦
3. 浦沢正三（藤女子大学教授）：ポリオいまむかし
4. 堀内基広（帯広畜産大学助教授）：牛海綿状脳症とは？

参加した多数の市民には、ウイルスとウイルス病について正しい知識を得て、理解を深めていただけたものと思います。

10月16日から18日まで、8会場で、500題を超える一般講演がすべて口頭で発表され、緊張感に溢れる討論が交わされました。

一般講演の他、次の通りの講演、シンポジウムが行われました。

10月16日（水）は、9時から17時まで8会場一般講演、17時から19時30分までスピカにおいて **Evening Symposium “ADVANCES IN THE GENETIC MANIPULATION OF VIRUSES”** が開催されました。レベルの高い講演が1,000名を超える参加者の科学的精神の高揚を促すシンポジウムとなり、主催者としてこの上ない喜びです。座長を喜田宏と河岡義裕が務めました。演者と演題は次の通りです。

1. Paul Ahlquist (University of Wisconsin-Madison) : “A positive-strand RNA virus replication complex parallels retrovirus and ds RNA virus cores”

講演内容は、最近 Molecular Cell に発表されたもので、RNA ウイルスの RNA 複製には共通のメカニズムが存在することを明らかにした画期的成果で、ウイルスの増殖過程の解明のみならずその進化を考える上でも重要な発見です。

参加ウイルス研究者に深い感銘と開眼の思いを与えました。

---

北海道大学大学院獣医学研究科  
 (〒060-0818 札幌市北区北18条西9丁目)  
 Report of the 50th Annual Meeting of the Japanese Society for Virology  
 Hiroshi Kida  
 Department of Disease Control, Hokkaido University  
 Graduate School of Veterinary Medicine  
 North 18, West 9, Kita-ku, Sapporo 060-0818, Hokkaido, Japan  
 TEL : +81-11-706-5207  
 FAX : +81-11-706-5273  
 e-mail : kida@vetmed.hokudai.ac.jp

## 2. Thomas W. Geisbert (USAMRIID): "Pathogenesis of Ebola Virus Infection in Nonhuman Primates"

新興・再興感染症を代表するエボラ出血熱の原因ウイルスは人に対して強い病原性を示すために恐れられています。生物安全基準レベル4の施設でのみ実施可能なエボラウイルスのサルに対する病原性のモデル実験の貴重な成績の発表で、参加者の興味を惹きつけて離さない講演でした。

## 3. Yoshihiro Kawaoka (The Institute of Medical Science, University of Tokyo): Molecular aspects of emerging negative strand RNA viruses

河岡教授は画期的なりバースジェネティクス法を確立し、これを利用してインフルエンザウイルスやエボラウイルスを人工合成して注目されています。氏は、1918年に2千万人以上の人命を奪ったH1N1スペインインフルエンザウイルスを部分的に再現しました。このウイルスのマウスに対する病原性が極めて強いことを確認し、スペインウイルスがなぜ多くの人命を奪ったのか、その謎を解明しつつある発表に参加者は息をのんで聴き入っていました。

10月17日(木)は9時から12時まで8会場で一般講演が行われました。

午後1時30分から2時20分まで、倉田毅日本ウイルス学会理事長の座長の下、将来を嘱望される2人の若手研究者のよく纏まった杉浦奨励賞受賞講演が行われました。

1. 片野晴隆 (国立感染症研究所)「ヒトヘルペスウイルス8の感染病学的研究」
2. 朝長啓造 (大阪大学)「ボルナ病ウイルスの持続感染と病態機序に関する研究」

2時20分から3時20分までスピカにおいて、世界のウイルス学研究者を代表する Webster 博士により、第50回日本ウイルス学会学術集会・総会記念特別講演が行われました。総会長の喜田宏が座長を務めました。

**Robert G. Webster (St. Jude Children's Research Hospital): "Past 50 years of influenza virus research and it's future"**

博士はインフルエンザウイルスの起源が動物の世界にあることを示す成績を初めて発表し、筆者を含め、世界中のウイルス研究者に影響を与えました。博士の総説的かつ論理的な語り口で将来を予言する講演に参加者は魅了されました。

次いで3時30分から6時まで第50回日本ウイルス学会総会記念シンポジウム「ウイルス病の克服に向けた展望」が高田賢蔵ならびに富樫武弘両博士の座長の下で次の通り行われました。

1. 日沼頼夫 (京都大学名誉教授):「日本ウイルス学会50年の歩み」
2. 有川二郎 (北海道大学教授):「ハンタウイルスとの戦い」
3. 喜田 宏 (北海道大教授):「新型インフルエンザウイルス対策」
4. 玉城英彦 (北海道大学教授):「エイズ対策」
5. 西山幸廣 (名古屋大学教授):「ヘルペスウイルス感染症の克服」
6. 下遠野邦忠 (京都大学教授):「C型肝炎の克服に向けて」

いずれも各シンポジストの世界的な業績に基づいた講演で、それぞれのウイルス病の克服に向けた強いメッセージが伝わり、裨益するところ大でした。

10月18日(金)は、9時から12時まで8会場で一般講演、午後1時から2時30分まで次のワークショップが8会場で同時に行われました。

「人獣共通伝染病」,「抗ウイルス薬」,「新しいワクチン」,「ウイルスベクター」,「ウイルス発癌の分子機構」,「昆虫ウイルスと宿主因子/ジーンサイレンシング」,「バイオテロリズムと危機管理」,「基礎ウイルス学と臨床ウイルス学の融合」

盛んな議論が交わされ、有意義なワークショップとなりました。ただし、いずれもユニークなトピックであり、会員の多くからどれを聴くか迷ったという、主催者にとっては嬉しい抗議が寄せられました。